



【口絵2】六臂観音菩薩図 開宝八年（975）ボストン美術館所蔵
 Photograph©3/31/2024 Museum of Fine Arts, Boston



【口絵1】水月観音菩薩図 乾徳六年（968）フリーア美術館所蔵
 ©National Museum of Asian Art, Smithsonian Institution,
 Freer Collection, Purchase-Charles Lang Freer, F1930.36



【口絵3】十二面観音菩薩図 雍熙二年（985）ハーバード大学美術館所蔵
Photograph ©President and Fellows of Harvard College

米国所蔵絹本着色敦煌画三題の位置づけ

田 林 啓

坂 尻 彰 宏

はじめに

世界最大の石窟寺院を開鑿し得た持続的仏教都市・敦煌を支えた造像作画システムとは如何なるものであったのだろうか。

一九〇〇年に敦煌莫高窟より、大量の古文書と共に発見された絵画類は、現在、中国のほか、英国、仏国、露国、印度、韓国、日本、そして米国に散在している。中国外に流出した資料のうち、周知の通り、英国、仏国の資料は、敦煌画研究の根幹を為し、また露国、印度所在の作品も大型図録の出版によって、国際的な美術史研究の舞台にのっていると言える^①。一方、これら探検隊に齎らされ、一機関に収蔵されるコレクションと異なり、一々数点の作品が各美術館に蔵される日本や米国の作品に関しては、整理の必要性の欠如も起因して、敦煌画史の中での位置づけが立ち遅れている。いずれも所蔵館等の図録で紹介される他^②、前者は奈良国立博物館『東アジアの仏たち』展でまとめて公開され^③、後者では、一括した成果として、中国の歴史学者による紹介や^④、自然科学的分析による顔料や基底材

の研究^⑤が為されている。こうした状況下で、両国の資料を、初述の課題解明のために、より有効に位置づけるためには、まずは、紀年銘を有する作品を取り上げて、発注者の身分、作品の質（作行き、材質）の相対的關係を把握することにある。日本所在の作品に関する当該研究は、目下進行中であるが^⑥、二〇二三年三月に米国所在作品を精査する機会を得られたため^⑦、その知見の詳細を報告すると共に、敦煌作画システム解明に寄与すべく、敦煌画中での相対的位置づけを示す。

今回調査し得た米国作品は、ワシントン・フリーア美術館 (National Museum of Asian Art) 所蔵の絹本着色「水月観音菩薩図」【口絵1、F1930.36、乾徳六年（九六八）】、同「被帽地藏菩薩像」(F1935.11)、メトロポリタン美術館所蔵の版画「騎獅文殊菩薩像」(CP4)、同「観音菩薩立像」(CP5、曹元忠開版、開運四年（九四七）)、ボストン美術館所蔵の絹本着色「六臂観音菩薩図」【口絵2、27.570、開宝八年（九七五）】、麻本着色「菩薩立像幡」(31.405)、ハーバード大学美術館 (Harvard Art Museums/Arthur

M. Sackler Museum) 所蔵の絹本着色「十二面観音菩薩図」【口絵3、1943.57.14、雍熙二年(九八五)】、絹本着色「持幡観音菩薩立像幡」(1925.12)、麻本着色「弥勒浄土図幡」(1943.54.1、天福十年(九四五))である。このうち、以下では、紀年銘を有すフリーア蔵水月観音図、ボストン蔵六臂観音図、ハーバード蔵十二面観音図に対して考察を加えていく。

1、フリーア美術館所蔵「水月観音菩薩図」【口絵1】

本作に関しては、坂尻・田林(二〇二四)⁸⁾でも考察する。本節の伝来、銘文・供養者の項は当該稿の概略であるため、そちらを併せて参照されたい。

・伝来

本作は、一九〇四年に敦煌県令の汪宗瀚から甘肅学政の葉昌熾に寄贈され、その後、呉興(湖州)の蒋汝藻、ニューヨークの山中商会の順に渡り、一九三〇年にフリーア美術館によって購入され、今に至る。

・作品の概要と特徴

本作品は、縦一〇七・一cm、横五九・一cmの絹本着色画である。全体に彩色が淡く、尊像における暈取りが強くないため、すつきりとした印象を与える。最大の特徴は、水月観音像が、正面向きで、かつ半跏坐ではなく、結跏趺坐することである。

尊格を描く画面上部は、大光背を負い、楊柳を手にする水月観音像を中心としており、その両脇に供養菩薩二体を配し、画面下部は

北宋・乾徳六年(九六八)の発願文と男性供養者像一体、女性供養者像三体を表す。上部の尊像枠の四方には、一つずつ短冊形があり、上の左右の大きなそれは、各々黄色地と赤褐色地に塗り分け、前者は中尊の尊名「南无大悲救水月観音菩薩」を記し、後者には文字が記された痕跡がない。この箇所において傍題が必要であるのは、水月観音のみであることは明らかであり、赤褐色地の短冊形が、なぜ附されたのかは不可思議である。ここで想起されるのは、ギメ美術館所蔵「弥勒如来図」(EO.1135、天福五年(九四〇))が西方浄土を意図して描かれていること⁹⁾や、白鶴美術館所蔵「薬師如来図」が釈迦とダブルイメージを持たされていること¹⁰⁾である。すなわち、本画の中尊にも尊格の併有が当初計画されていた可能性がある。一方、下の短冊形は、やや小さく、供養菩薩に伴うもので、上の二つと配色を反対にし、向かって左を赤褐色地、同右を黄色地として、バランスを図る。いずれも「持花供養菩薩」と書す。水月観音の頭上では、七弁の円花およびその左右の十三弁蓮華を描き、それぞれを囲む葉から瓔珞形の装飾を垂下させる。中尊の水月観音【図1】は、据香爐と二水瓶を置く壇を前にして、蓮華座に結跏趺坐する。下端に雲氣を伴う大円光を負い、その内側に更に火炎光背、二重の身光と三重の頭光を具す。赤系の裙と瓔珞、瓔珞と接続する胸飾、宝石を連ねたような頸飾、臂釧、腕釧、条帛、耳環、化仏を附す宝冠を身に着け、屈臂した右手を上げて、その第一指と第二指で楊柳をつまみ、下垂した左手の第三指と第四指で宝瓶の頸部を挟み持つ。条帛と裙にはそれぞれ、三弁の花文と松葉文のような植物流を散らす。また裙の彩色にはグラデーションによる立体感がつけられ、同様の手法は光背の一つ一つにも認められる。面貌は、肩幅とほぼ同等の幅が



あり、左右に広がる切れ長の目、長い鼻梁、下部に寄る口、肉厚の頬と顎を特徴とする。身体は、胸の張りや腰の括れを強調する。中尊の足下で片膝をついて跪坐する持花供養菩薩像は、華籠を持して、中尊に向かって散華する様子を示す。中尊同様にくつくと豊かな頬と顎、下方に寄る口、切れ長の目が特徴的で、側面形であるため、鼻先の突出も強調される。

【図1】水月観音菩薩像 水月観音菩薩図部分 乾徳六年(968) フリーア美術館所蔵 ©National Museum of Asian Art, Smithsonian Institution, Freer Collection, Purchase-CharlesLang Freer, F1930.36

一方、供養者像【図2】は、発願文に向かつて左側に二体の女性坐像、向かつて右側に女兒立像と男性跪坐像一体を各々褥上に配す。いずれにも題記が附く。題記、発願文については後述するが、女性坐像のうち、発願文寄りのやや大きな像が母の像であり、その後ろが「小娘子陰氏」像である。「女小娘」の女兒像も含めて、女性像はいずれも鳳凰冠を戴き、二本の寶石を連ねる頸飾とその下のスカーフ状の頸飾、更に垂飾を伴う寶石状の胸飾を着け、その身分の高さを示す。鳳凰冠は、曹元忠開鑿の第六一窟の曹議金の娘(于闐王后)像やギメ美術館所蔵「被帽地藏菩薩十王図」【図3、



【図2】供養者像・発願文 水月観音菩薩図部分 乾徳六年(968) フリーア美術館所蔵 ©National Museum of Asian Art, Smithsonian Institution, Freer Collection, Purchase-CharlesLang Freer, F1930.36

MG. 17627 太平興国八年（九八三）】に描かれる曹議金の末裔である張氏像に代表されるように、王族の女性の装飾として用いられる。身に纏う披巾、上衣、內衣、裙にも文様が挿され、上衣や裙に金泥で鳳凰や三弁花文等が入られる。披巾や內衣は淡い彩色を用いて絞り染め風に表現し、あるいは飛禽を描く。側面形の顔は、上記の供養菩薩と同様の特色を持つが、より詳細に描き込み、上下臉の盛り上がりや鼻翼も表現し、更に目の大きさや角度、鼻先の突出具合によって各人の描き分けも意識されている。額の中央に花鈿を付け、頬に薄紅を挿しており、ここにも貴人の裝飾性が再現されている。最後に、当時の敦煌の統治者である曹氏の姓を附す男性像であるが、幞頭を戴き、赤褐色の腰帯を巻いて黒袍を纏い、柄香爐を両手で持して跪坐する。幞頭は、脚の先端がピンと張って上を向き、また袍の袖と襟後部からは、女性像と同様の絞り染め風に彩られた



【図3】被帽地藏菩薩十王図 太平興国八年(983) ギメ東洋美術館所蔵

內衣を覗かせる。全体に赤みがかった肌色を呈する顔貌は、やはり太い眉や先端を細くする口髭、やや突き出す唇に個性が現れ、また頭髪の一本一本が描線で丁寧に表示される。

全体を通して、彩色は淡いが、グラデーションは効果的に施され、また供養人像の彩色は、尊像に比して、入念に為され、各服飾の塗り分けも行われる。女性上衣の文様、そして供養者それぞれの面貌の描き分けが認められ、各人の個性が表出されている。描線に関しては、尊像の肉身の描き起こし線や供養者像の顔のそれは、形態に則して比較的丁寧で張りのあるものであるが、その他の描線は、揺れ動き、ラフスケッチを思わせる様子を示す。ラフスケッチ風の描写の最たるものは、中尊の耳環や腕釦などの裝飾の輪郭線であり、描写水準の差異は、女性供養者の指の数すらも明確に示さない手の表現にも認められる。

基底材の絹【図4】は、中尊に向かって左端の箇所（大円光横の彩色のない部分）において、1cm四方あたり、経糸五一本、緯糸二二〜三〇越であり、庶民発注の白鶴美術館薬師如来図のそれ（画面下部の整った箇所）で経糸五四本、緯糸二八越⁽¹⁾と大きく変わらない。ただし、白鶴本等の敦煌画を含む仏画に一般的な画絹、すなわち、一箒目に二本の経糸を通す諸経⁽²⁾と様子が異なり、経糸が均等に一本ずつ通される平織に近いものと見受けられる。

以上の水月観音図は、顔



【図4】画絹 水月観音菩薩図部分 乾徳六年(968) フリーア美術館所蔵



【図6】千手千眼観音菩薩像 太平興国六年(981) ギ
メ 東洋美術館所蔵



【図5】水月観音菩薩図 建隆二年(961) 四川
博物院所蔵

貌表現における堂々たるふくよかさ、側面形での鼻先の丸み、男性
供養者像の脚の張る幞頭など、至る所に紀年銘にふさわしい十世紀
後半・北宋代の特徴が看取される。また中尊の光背の構成において
も、四川博物院所蔵「水月観音菩薩図」【図5、建隆二年(九六一)】
や前述ギメ美術館「被帽地藏菩薩十王図」【図3、MG. 17662、太



【図7】水月観音菩薩像 ギメ東洋美術館所蔵

平興国八年(九八三)【の中尊、同館所蔵「千手千眼観音菩薩図」【図
6、MG. 17659、太平興国六年(九八二)】の被帽地藏像と近似する。
最も注目すべきは、中尊の図様である。一般に水月観音と言え
ば、ギメ美術館の紙本画【図7、EO. 1136】に代表される図様、す
なわち側面形で、竹等の植物を伴い、岩座にゆったりと片脚を踏み
下ろして坐す姿を思い起こす。しかし、本画では、正面形で、結跏
趺坐する。これについては、トーマス・ロートンも早い段階で着目
するが、正面形を時期の遅れるタイプと捉えている¹³⁾。確かに、ギメ
紙本画や大英博物館所蔵紙本画(Ch. i. 009)¹⁴⁾、そしてギメ美術館「千
手千眼観音菩薩図」【図8、MG. 17775、天福八年(九四三)】の供
養者枠に登場する同像などの十世紀前半までの作品は側面形の半跏
坐であり、その後、正面形の半跏坐の作品の出現は前掲四川博本
【図5、建隆二年(九六一)】の十世紀後半と遅れる。四川博本では、



【図9】菩薩坐像 大英博物館所蔵 Photograph ©The Trustees of the British Museum



【図8】千手千眼菩薩図 天福八年(943) ギメ東洋美術館蔵

竹や岩も失い、周囲に諸難救済の場面を描き、聖観音や十一面観音と変わらない表現となっている。フリーア本は、更に片脚を踏み下げることもしておらず、その図様は、むしろ大英博物館所蔵の紙本画【図9】に表されるような、十世紀に敦煌で広く使用され、各種の図像に転用された菩薩坐像のそれを基本としている¹⁵⁾。清水眞澄はこの坐法の変化について、岩座でなく蓮台に坐すことと合わせて、『華嚴経』型の水月観音から『法華経』型の同図像への転換を看取する¹⁶⁾。一方、松本榮一は、敦煌の作例から、唐代の周昉に始まる水月観音図像は、「西方芸術を手本とし、それから次第に支那化されて来た」と捉えるが、具体的に、ギメ紙本画にみられる暈取りや丈高い宝冠、自由な氣に富む姿態などにインド・西域的要素を読みとり、それらが抜け落ちて中国化したものが大英紙本画やギメ天福八年像とみる¹⁷⁾。この流れを延長していくと、四川博本を経て、当図像が地方化した結果がフリーア本と捉えることが可能であろう。これは、敦煌画一般に地ならしされ、画工集団の描画体制に水月観音が組み込まれた結果を示すと言えよう。例えば、天福八年像と共に表される発願文に「是以修諸故事創此新図（ここに、諸々の故事を修めて新たな図を創る）」との文言が見えるが、これを水月観音を含む千手観音図全体と考えると、この時点での当図像の新様性が窺え、やがて『法華経』との融合を経て、二五年後の本画において、地方化を果たしたと見ても無理はない。そして、下記のように、本画に息子の新婦の安産という、極めて個人的かつ直近の祈願が込められていることも、図像の地方化と軌を一にする傾向と言えよう¹⁸⁾。

以上によって、本作は、北宋という時代性と、高低の相混じる描画水準を具え、図様においても汎用性と個性のあるものが併存させ

る。更に比較的新しい図像を地方化させて、広く流通して用いられた型によって描いている。その上で、赤系の裙や条帛などの目立つ要素や、肉身線など図像の重要な箇所、そして、個性を生む供養者の顔に焦点を当てて画力を注力することで、一見して見栄えのする作品に仕上げている。

・発願文・供養者

【録文】¹⁹⁾

(1) 小娘子陰氏一心供養

(2) 慈母娘子「李」氏一心供養

1 絵観音菩薩功德記

2 窃以、弥陀上足号観音焉、願力難思、慈悲普極。分形種類救苦毒於

3 三途、現化多門拔幽趣於六道。是施无畏者、急難消除。有識

4 虔誠尽絵者矣。即有我娘子以男司空為新婦小娘子難月之

5 謂也。伏以司空、星辰降瑞、江海呈祥、役紫毫而八体宛然、弯素月而六

6 鈞有異。遂乃發一心願、敬画真容。具相嚴成、丹彩已就。伏願娘子以司空

7 承斯緣善、福祚寿松柏之年。小娘子共男郎君頼此勝因、禄寵等鶴龜之載。然後金枝九族、玉葉一宗、咸沐良縁、齊登覺路。

9 于時乾徳六年歲次戊辰五月癸未朔十五日丁酉題記

(3) 女小娘□(子)宗花一心供養

(4) 節度行軍司馬「金」紫光禄「大」夫「檢」校司空兼□□□□
□□□曹延□□(供)「養」

【発願文の翻訳】

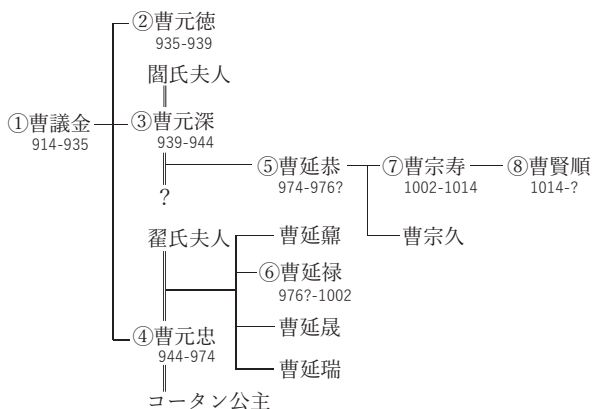
観音菩薩を描く功德についての記

窃に思うに、阿弥陀仏の高弟は観音菩薩であり、その願力は計り知れず、その慈悲は限りなく広大である。さまざま姿に分身して、三途に苦しむ者を救い、さまざま姿に現れて、六道に迷える魂を救う。これこそ畏れを取り除く者であり、困難を消し去るのである。(だからこそ) ころあるものは真心をもってみな(その姿を) 描くのである。つまり、(これこそが) 我らの娘子が息子の司空とともに新婦小娘の臨月のために(その姿を描くことを) する理由である。思うに、(その) 司空は、星辰が瑞兆を現し、江海が祥瑞を呈すように(才氣と徳望に恵まれており)、紫毫(の筆) を取れば、八体を宛然と(書きあらわ) し、光り輝く月を湾曲させるように強弓(を引くこと) に飛び抜けている。そこで、(このようにすばらしい司空のためにも) ひたすら願いを込めて、観音菩薩の真容を敬って描くことにしたのである。その姿は嚴肅であり、丹彩によって描き上げられた。娘子が息子の司空と良き縁によって、幸福に寿命が松柏のように長くありますように。小娘子(お嬢さま) と息子の若さまがこのすぐれた因縁によって、報酬と恩寵を得て鶴龜と等しく長生きしますように。それから、(この) 尊い一族がみな良縁に恵まれ、みな悟りの道を歩めますように。

(北宋) 乾徳六年(九六八) 歲次戊辰五月癸未朔十五日丁酉に記した。

【供養者】

発願文等で言及された四人の供養者たちは、明らかに乾徳六年(九六八)当時の敦煌を支配した曹氏帰義軍節度使の一族である【図10】。乾徳六年(九六八)は第四代曹氏帰義軍節度使の曹元忠の治世(在位・九四四～九七四年)にあたる。供養者のひとりの曹延□は、三公の一つである司空や節度使府の要職の行軍司馬を帯びる曹氏の高位者であり、曹元忠の兄の曹元徳あるいは曹元深の息子にあたり、その母の李氏は元徳・元深のいずれかの妻にあたる⁽²⁰⁾。李氏は息子である曹延□の新婦(よめ)の陰氏の安産祈願のために本作を発注している。なお、曹延□の女(むすめ)である宗花は、曹元忠兄弟の孫の世代が持つ「宗」字付きの名を有しており、曹氏一族の由緒正しい令嬢であることがわかる。



【図10】曹氏帰義軍節度使の系譜

二、ボストン美術館所蔵「六臂観音菩薩図」【口絵2】

・伝来

本画は、清末の官僚にして古美術の一大コレクターであった端方(一九六一～一九二一年)の旧蔵⁽²¹⁾で、山中商会を経て、一九二七年

にボストン美術館に購入された⁽²²⁾。

・作品の概要と特徴

縦八八・八cm、横五八・五cm⁽²³⁾で、やや小さめの掛幅である本画は、靈修寺の尼僧・戒浄を施主として、開宝八年(九七五)に制作された。敦煌に作例の多い六臂観音を中心とし、その周囲に諸難救済、善童子と悪童子、そして区分帯を挟んで下方に供養者像二体ならびにその侍者を各々描く。像はいずれも身体が二等辺三角形のシルエットを有し、下半身に重心がある。図様と様式共に、一般的な敦煌画の枠組み内に収まる作品であるが、最大の特徴は、基底材にあり、綾絹が用いられていることである。概ね、保存状態は良好であるが、中尊周囲の頭上飾りの植物や自然景、蓮池や壇において絹の剥落が目立ち、緑青焼けが影響しているように見受けられる。

中尊の観音は、二水瓶と据香炉を置く壇を前に、緑の太い腰帯を伴う裙を穿いて、蓮台上に左脚を踏み下ろして、半跏坐する。頭上の植物や瓔珞垂飾、あるいは光背は、フリーア水月観音と類似の構成から成っており、光背の外周部下端にはやはり雲気表現がある。下方に、方形のブロックによって構成される蓮池が見られ、あたかもそこから湧出した様子を示す。顔貌は、下膨れの輪郭に、左右に広がる目と尾翼が印象的である。頭には、異様に丈高い光背を負う化仏を正面飾りとし、団華形の装飾と線描による冠縵を伴う宝冠を戴く。フリーア水月観音同様に、胸が大きく張り、腰が括れており、肩に垂髪を懸ける。六臂は、上臂で日月(右手に日、左手に月)を掲げ、胸前の中臂で紅蓮をつまみ、下臂は膝脇に据えて、掌を上に向ける。装飾は過多とも言える程に、所狭しと配される。すなわち、

頸に懸けた紅白の帯は中臂を経て手前に垂下し、褐色の条帛を左肩から右腰に渡して纏い、黒の連珠形の頸飾の他に、黄色の耳環、胸飾、臂釧、腕釧、瓔珞を身に着ける。彩色は、肉身部において全体に白の下地の上に、濃淡の橙による暈取り（暈染）を入れて立体感をつける。裙や条帛は赤褐色とし、更に裙は、濃淡によるグラデーションをつけ、また台座の各蓮弁も上方の橙と下方の白で塗り分けるが、いずれも定型化した表現である。線描は、肉身線や蓮弁、冠繪が赤褐色線、服飾が墨線によって各々為されるが、形態に則して確信的に引かれる前者に対して、後者はラフスケッチの下描きを思わせ、太さも一様である。

観音の左右には、向かって左に「善童子」、同右に「悪童子」が傍題を具えて、中尊に身体を向けて侍立する。これらの彩色や線描等の描き方は、基本的に中尊と同様である。いずれも白い內衣に、中尊の裙同様のグラデーションをつける赤褐色の寛袖長衣、たつぷりとした裙を纏い、両腕で大きな巻物を抱え、巻頭靴を履き、頭に円形の髻二つを結う。また、長衣の肘辺りに樹葉のような緑の鋸歯状の装飾を連ねる。善童子が丸顔、両手で合掌するのに対して、悪童子は面長で、両手を上下互い違いに配する。後者の両手の表現は、あたかも笏や巻子などの持物を握る際の様子を示すものであり、図様を転用していく中で残った表現であろう。²⁴ また、彼らは、本来、

人々の善業・悪業を記録し、十王に報告する役目を担うため、手にする巻物は巻子であるべきだが、ここでは、布（反物）のような表現となっており、細部表現の形式化が見受けられる。本画の善悪童子の類例には、低位の官職（蘭官）を有す米延徳発願の「観音二童子像」（大英博物館所蔵、Ch. LVII. 004、太平興国八年（九八三））²⁶が

あり、二髻を結び、大きな巻子を持ち、また肘辺りに鋸歯状の装飾をつけることまで共通する。

一方、童子の上方、中尊の周囲左右の僅かな空間では、緑青と絹地を交互に縞状に配することで、自然景を成し、左右に二難ずつを各一人物によって表す。いずれも『法華経』普門品に記される観音救苦²⁷に基づく。人物はいずれも黒の幞頭と茶色の袍を身に着け合掌して、観音の力を念じており、下腹部が膨らみ、メリハリのない身体、下膨れの顔貌、固い筆で描かれた単純な作りの目鼻と赤を挿した唇、脚部の下がる幞頭を特徴とし、五代期・十世紀前半の要素を残す【図11】²⁸。それぞれに附された傍題には、向かって左上「或在須弥峯」（①）、同左下「推落大火坑」（②）、同右上「墮落金剛山」（③）、同右下「或漂灑流巨海」（④）とある。法華経の記述に沿うと、左下（②）↓右下（④）↓左上（①）↓右上（③）と、下から

始まり、左から右へと展開する。③以外には、半円形の緩やかな山岳が表されるが、これも自然景の一部であり、各場面を区分する標識となっている。場面は、②火を背後に負う、④縁が鋭角で白形の上の上に立つ、①円柱形の峰から下を見下ろす、③前面に鋭く突き出す山崖の縁に立つ様子を示す。いずれも十世紀前半の大英図書館所蔵「観音経冊子」（S. 6983）に見られる表現をより記号化したも



【図11】諸難救済図 六臂観音菩薩図部分 開宝八年（975）ボストン美術館所蔵 Photograph©3/31/2024 Museum of Fine Arts, Boston

のであり、中でも須弥峯の描写【図11】は、当冊子のそれ【図12】を若干形式化したのみである。

続いて、尊像画面の下方に、黄色の界線を隔てて表される供養者像【図13】についてみていく。発願文を挟んで、向かって左右に大きな僧形坐像を二体描く

が、この両者が発願者であり、残りの小さく表される、左側の僧形一体と女兒一体、及び右側の女兒一体は侍者の役割を担う。背景には、棕櫚竹のような植物が配される。輪郭からはみ出る彩色、頬に明確な赤系の暈染を入れることでの描法は尊像部分とは異なる。輪郭からはみ出る彩色は、庶民発願による白鶴美術館「薬師如来図」【図14、天成四年（九二九）】にも認められる。僧形像は、いずれも內衣の上に、黄色の褌衫を着け、その上に更に、濃い赤紫色の袈裟を半偏袒右肩式に纏い、肩や腕にかかる袈裟は淡い赤紫色の裏地を見せる。また、僧形像のうち内側二体（発願者）は、褌衫と內衣の間の胸前から絞り染め風の布を覗かせる。向かって左側像は、格座間を刮る方座上に両膝をついて坐し、両手で柄香炉を握って供養し、台座下に靴を揃えて置く。同右側像は、長いフリンジのある褥の上に両膝をついて坐して、合掌した両手先で紅蓮華をつまむ。両者に具わる題記から、いずれも霊修寺の尼僧で、左側像が施主の「戒浄」、右側像が「明戒」であることが分かる。フリーア水月観音図ほどに



【図12】 諸難救済図 観音経冊子部分 大英図書館所蔵



【図13】 供養者像・発願文 六臂観音菩薩図部分 開宝八年（975） ポストン美術館所蔵 Photograph©3/31/2024 Museum of Fine Arts, Boston